

# 市史編さんだより



(57)

## 最初の会社、 培養商会と流通

東村山地域の最初の会社は何だろうか。それは最初農商会社として計画された培養商会である。明治初期、それまでの物資輸送とかわっていた助郷制度が大きくかわり、明治五年（一八七二）から陸運会社が各街道におかれた。この会社は八年二月から内国通運会社にかわる。この間、五年一〇月から甲州街道に馬車会社が設立され、東京・八王子間を二頭立の馬車が往復し、郵便物と貨物を運ぶことになった。

このような全国的に統一されはじめた通運体系に、東村山地域も対応することが求められた。この地は幕末以来、青梅街道経由で陸路江戸に出るルートが、物資は運賃の安い河川交通を利用し、所沢から引又河岸（現埼玉県志木市）に運んでいた。新河岸川・荒川を下り江戸に達するコースがこれである。東村山地域で地場産業の物資集荷と江戸下りの肥料の取扱いを担当していたのは大岱村の市川家である。

三月に青梅橋高砂屋で会議を開き成立したものの、当初「培養商業仲間合規規則」をつくり討議したが、やがて「培養商会」と称するようになる。会頭には市川幸吉が就任し、郡内を東西中南北の五組にわけ、久米川村・大岱村の属する北組は木下四郎左衛門・立川伊兵衛・町田六左衛門・野崎半左衛門・増田久右衛門が委員となった。

この商會が物資運送上提携したのは志木宿運送会社と中野・淀橋・成子・数寄屋河岸等の運送店である。すでに明治初年より志木宿および中野・淀橋からの運送につき馬車業者の荷物取扱いが乱れており、その是正が課題となっていたらしい。各業者との締約書によれば、早船・並船による荷物輸送や運搬上の損害保証、駄賃、運送時間延長時の保証などが決められている。たとえば尾張糠一〇〇俵につき三五銭、地糠二五銭、早船荷物は三日経過後は駄賃は一割引き、駄賃は上り荷一駄五銭、下り荷二銭となっている。

培養商会は取扱品が主に肥料であったため培養と称されたが、生産力上昇をねがう相場研究も行なわれている。農事改良を直接の目的にしたものではなかったが、この面はやがて農會や勸業會が組織され品評も開かれる背景となる。右は明治十年代中頃までの状況であるが、川越鉄道開通前後の東村山地域の物資輸送の一コマであった。

（近代担当 渡辺隆寛）